



# 乞 食 と 肩 拾 郡 升 作

一、乞 食

イ、不具と乞食

ロ、乞食の美しさ

ハ、羞恥心

ニ、乞食の場所

ホ、恵み深い人

ヘ、地域と日

ト、遊廓

チ、四天王寺

リ、墓地

ヌ、日本全国を股にかけて

ル、表町と裏町

ヲ、我孫子觀音と一心寺

ワ、乞食と貯金

カ、食ふか食はれるか

ヨ、脱俗者

二、肩 拾

イ、權

ロ、ガタロ

ハ、掘屋

ニ、雨蛙

ホ、店終ひ

ヘ、ふくろ

ト、寄せ高と肩拾の收入

チ、收入の少い人々  
リ、死線を越えて  
ヌ、恥しい時代  
ル、一人前の肩拾  
ヲ、地域と肩  
ワ、肩を出す家  
カ、肩を買ふ家  
ヨ、肩の値段  
タ、何が氣樂か  
レ、眞に氣樂か

ソ、塵箱を通して社會を視れば

一、乞 食

イ、不具と乞食

三年か五年生活を共にして見ると何なん人でも、若しその人が善人であるならば、乞食ほど可愛いゝものはないと云はれる様になられるに相違ないと思ひます。日本民族ほど清淨を好む民族は他にはありませぬ。潔白で、淡白で、單純で、正義を愛好致します。完全を尊び不完全を嫌ひます。ですから惡と不善と曲と不具を極度に忌むのです。乞食の大部分は不具者です。機械鋸で手を失つた者、グラインダーで足を取られたもの、交通事故で手も足

も失つたもの、生れながらの盲目、榮食不良と梅毒から光を失つたもの、カリエスに苦しむもの、神經痛や崩れ行く癲病に懊惱するもの、悪病にせめざいなまれて居る老人や若者もあります。妻に先立たれ、子供に先立たれた天涯孤獨の老人が、働くことも出来ず、働く先もなく、虛弱と榮食不良の爲めに腐敗しかけた鯖の目様などんよりとした眼に涙をたゝへて居り、夫に死別した寡婦が低脳の子供故に名譽も地位も財産も總てを捨てゝ巡禮を致して居ります。

ロ、乞食の美しさ

ところがそうした不具者に完全に近い精神的な圓滿さを發見することが出来るのです。乞食ほど淡白で單純で清淨と正義を愛好し、完全と圓滿を尊ぶものはないのです。彼等ほど不善と曲を嫌忌愛情に満ちてゐるものは少ないのです。僻の出來た時代を過ぎて人の情に生きる時代の乞食には無慾に近いほがらかさがあります。自分の無能力をよく自覺してゐる彼氏達の己れを忘れて己れを捨てた美しさは困った仲間を救う爲に持金全部快く投げ出します。僅かの收入の大部分を與へて喜びます。無邪氣な彼氏達の純真さは夏の冷サイダーの様に私達をスーとさせるには充分です。これが私達をして彼氏達を好きにさせる原因なのです。

ハ、羞恥心

ですから寒風の中に親子が抱き合ふて軒下で寝てゐるのを見て

は何んな人でも斷腸の思ひが湧いて來なければなりません。彼等に若し身頼があるならば、父があり母があるならば、乞食はしなくてもよいであらうに、させもすまひにと思ひます。唯生活の爲めの故になつかしい故郷を離れて異郷の空で、街頭で恥を晒して居るので。知人があり、親類があるところでは、到抵出來ない恥しい仕事です。人々は申します。彼等には羞恥心が全然歎亡して居る！と。ところが彼等は不具者であるだけに人一倍の恥を感じます。唯彼等が口腹の爲めの故に恥を凌いで居るに過ぎないのです。私が之等の人々と生活を共にする様になつて間の無いとき天下茶屋の聖天様へ参詣致しました。石段の脇に並んでゐた乞食達は全部顔を隠してしまひました。私は毎日参詣致しました。

二日三日と日が経つにつれて一人減り二人減りしてゐたが一週間には一人も居らなくなりました。恥しかつたのです。然し今日では一心寺や天王寺で、また新世界や阿部野墓地で顔を合せますとにこくとした御挨拶を受ける様になつて居ります。然しそれでも人出の多いときには恥しそうに致します。哀しいこと、辛いこと、殘念なこと、腹立たしいこと、それ等は總て面白ないと思ふことから發足して居るのです。人知れず涙を流すことも羞恥心からです。

— 食と屑 —

でも人出の多いときには恥しそうに致します。哀しいこと、辛いこと、残念なこと、腹立たしいこと、それ等は總て面白ないと思ふことから發足して居るのです。人知れず涙を流すことも羞恥心からです。

### ホ、惠深い人

次に何んな人が最もよく惠んで下さいますかを報告申し上げたいと存じます。恵まれた家庭で樂々と育つたものは苦勞を知らないから駄目です。勿論自分自身で得た金のないことも一因ではあります。

— 食と屑 —

おつさんまた來た。これで三へん目や』等と云はれる様では生活が出来ませぬ。それでも流しに出るものは表戸の開いた家ばかりです。大阪を三十區割して毎日違った方面へ出かけます。『あの無大師遍照金剛と空海の御名號を稱へつゝ門附に廻つて参ります。北新地、南新地、今里新地、飛田、松島、住吉、そらした紅燈地區に惠んでくれる人が多いのです。カフエー、喫茶店、遊廓等が顧客です。あるものは南の神様ですからカーン！ カーン！ と鐘を叩いて行けば仲居や女給や女郎が喜捨して下さいます。

寺、一心寺、阿彌陀池、阿部野墓地、新世界等の篤信家や見物人が集合して来る特定の場所に年が年中同情深い人を待つて居ります。ある者は淡島様を背負つて流して参ります。淡島様は白血流しの神様ですからカーン！ カーン！ と鐘を叩いて行けば仲居や女給や女郎が喜捨して下さいます。

何んなところで乞食をするかと申しますと、あるものは天王寺、一心寺、阿彌陀池、阿部野墓地、新世界等の篤信家や見物人が集合して来る特定の場所に年が年中同情深い人を待つて居ります。ある者は淡島様を背負つて流して参ります。淡島様は白血流しの神様ですからカーン！ カーン！ と鐘を叩いて行けば仲居や女給や女郎が喜捨して下さいます。

### ニ、乞食の場所

らうと思ひますが、ボッチャンは駄目です。若者も駄目です。學生も駄目です。それかと云つて商人や金持はさげしむばかりで惠んでは下さいませぬ。老人も駄目です。金も無いでせうし、涙も少くなつて居りませう。不人情な人に限つて快く惠んでは下さいませぬ。事情も知らずに『何んな良い體格をして居りながら乞食をして居る、一文もやる必要はない』と大聲で聞えよがしに申されます。何んと申しましても三十五歳から五十歳の働き盛りの世帯を持つた苦勞盛りの人が一番よけいに惠んで下さいます。人格の優れた篤信家が心からやさしく惠んで下さいます。子供の無い家庭よりもある家庭がよけいに惠んで下さいます。庭が亂雑になつて居る家庭に人情が多いのです。家のキチンと整つた家庭は涙を知らない人が多い様です。人の頭に立つ人よりも使はれて居る苦勞人がよけいに人間らしい愛情を持つてゐるかに思はれてならないと申します。學校の先生や會社員やインテリは批判的に眺め乞食の救濟は國家でやる可きだ等と理屈がましく申しますが、職工さんは理論も何もなく氣の毒と考へて下さる様ですと申します。中年の苦勞人が、貧乏人が一番に涙もろいのです。

— 食と屑 —

地帶の細民職工街がよいのです。このことの證明は職工や労働者の休日である一日、二日、十五日、十六日、日曜日、祭日に惠まれる高が多いので知ることが出来ます。二十一日は御大師様で此の日は信仰の篤い人から貢ひが多いのです。彼岸や盆は一般の人、特に新佛のある家からの貢ひが多いのです。

### ト、遊廓

同様な意味で苦勞人の多い紅燈地區は乞食や巡禮には有難いところです。女郎や曳子がよく惠んで下さいます。女給や仲居も惠んで下さいます。客は一文も下さいません。兩足の無い盲目に近い女の乞食の言ふのは斯うです。『家中に入るのを嫌うから外に居ると二階から女郎が投げてくれます。曳子も快よくくれます。日によると飛田だけで六圓もあります。少ない日でも貳圓になります。この金を留めて置いて五月の雨や全然動けなくなつたときの用意にして置きます』。

飛田の本通に出て居る盲日の男は斯う申します。『檢徵のある日に女郎が一番よけいにくれます。苦勞して居りますからなあ』以上の大乞食によい場所としては市場の入口があります。女の買物客が惠んで下さるのです。

て善女からの恵に浴しますが、午後は見物客が多いのです。お上りさんから恵まれるには相當のコツが必要です。腕次第です』と片足の男は申します。

### リ、墓地

『若い娘様は顔を赤らめて小走りに前を通り過ぎます』と墓地に出て居る老人は申します。  
阿部野墓地に片手兩足の無い男が、片足しか無い男と隣り合せて座つて居ります。前者は十數年を此の墓地で暮して居るのでなしも澤山に出来て居ります。後者は出でからまだ三年位にしかなりませぬ。ですから前者が參錢貰つたときは後者は一錢しか戴けませぬ。前者が五錢のときは後者は二錢で、十錢のときは五錢しか惠まれませぬ。不幸の程度となんじみの程度に比例するのです。若し別々に離れた場所で居れば後者の收入は更に半減されるかも知れませぬ。前者に恵むから後者に出さねば義理が悪い様に思ふ人もあると思ひます。

### ヌ、日本全國を股にかけて

『日本國中で一番情の厚いのは四國の阿波です。之に比較すると土佐は通り悪いのです。北國は一般によく、新潟縣は北半分がよいのです。中部以南は駄目です。取締の一番嚴重だと思はれたのは岐阜縣でした。』と申して居る乞食があります。

### ヲ、乞食と貯金

『我孫子の觀音様では年越の日に三十圓を貰つた経験があるが、益や彼岸には一心寺で五圓貰つたのが山でした』と云ふ者もあります。

『表町と裏町と横町を比較すると裏町や横町に貰ひが多いのです。表町では主として金を恵まれるが、裏町では米が半分あります。五軒で一合位です、昔は入物を入れて下さいましたので量が多かつたが、今日では片手で握つて出されるのでしたものです。都市と農村を比較すると市中は金が多く、田家は米が多いのです。それでも二十一日のお大師様には米が多く、一日に二斗位も戴けます。此の米が一升二十五錢で賣れるのです。

### ル、表町と裏町

からは、貰つたものを食ひ、恵まれた金や米を溜める様に自然になつたのですが、現在では他に楽しみがない爲めに、そしてまた行先を考へての心配や必要から始めた貯金が溜りに溜つて、今では蓄へることが楽しみとなり、財産が増加して行く心強さが楽しみとなり、貰ふことが、乞食することが、恥しいけれど、楽しみとなつて居るものもあります。毎日の居ないところで貯金と通帳や公債を眺めることに無上の喜びを覚える様になつて居ります。そうした理由から一萬圓爺さんも生れて参りました。千圓、五百圓の貯金をして居るものも多勢居ります。

貯金のない人達は犬を連れたり、鳩を飼つたりして、動物と一緒に人生に潤ひを得て居ります。妻子は居ないが妻子に代る犬と二人で家庭生活を楽しんで居ります。また拾つたマッチカラットを蒐集したり、書はがきを蒐集したりして楽しんで居る者もあります。金を蓄へるのも一つの蒐集癖と云ひ得るのではないかと考へます。斯うした平和な乞食の社會にもたまには次の様な大騒動が持ち上がることもあります。

### カ、食ふが食はれるか

二つの瘦せ蛙がありました。二つとも脊が低く色も黒いものでした。本籍と年齢が違つてゐる外は、一方が營養不良からか、憤怒の爲めか、微毒の結果からか、その各々の爲めか、總ての結果

からか盲目となつて居り、他方が跛であつたことだけの相違があるだけでした。盲蛙は極く最近に視力が衰へ始めたが二三ヶ月で全然視力を失つてしまひました。誰もこれを疑ふものもなく、可愛そうにと思ふばかりでした。盲は跛に先曳をさせて毎日天王寺へ乞食に出かけました。八月の眞紅の太陽が西へ落ちた時分に歸つて來た盲に『此の頃は何うか?』と聞くと『さつぱり駄目ですか?』と答へるのでした。『先曳に毎日五錢をやらねばならず、餘り暑いので咽喉が渴くと氷を食つたりラムネを飲んだりするが、一人で飲むわけには行かず先曳にも飲まさなければならないからつまりません。』それでも盲蛙は最近に貯拾圓の貯金を致しましたところが寒さの爲めに乞食が辛くなりかけた十一月の初頃、盲蛙は借金を返すのだと言つて貯金を引出して、そのまま姿を消してしまひました。翌朝早くいつもの様に先曳の跛が来て『盲はあるのか?』と聞くのでした。『居ない』と答えると、それでは若しかする貯金を引き出しては居ないか』と重ねて聞くのでした。『貯金は貯拾圓全部引き出した』と再び答へると黒い顔を蒼くしてぶる／＼震ながら『あの金は私の金だ。氷の間かゝつて貯めた金だ。盲が此處の主任さんに預けて置けば確實だからとすゝめるの

で安心して盲に渡して預けて置いてもらつたのだ』勿論盲蛙が盲

## — 拾 屑 と 食 乞 —

蛙の名義で盲蛙が永年かゝつて苦へたものとの説明を附して預けて置いたものでした。跋は盲の親類が神戸にあることを盲の口からかねがね聞いてゐたので匍匐様にして神戸へ盲のあとを追つて行きました。然し其の後三年経つのに二蛙とも未だに歸つて参りませぬ。

ヨ、脱俗者

最後に良寛さんの詩集の一部を掲げて徹底した乞食の心境を披露致したいと存じます。

— 拾 屑 と 食 乞 —

蕭條三間の屋  
粥を啜つて寒夜を消し  
日を數へて陽春を遅しとす。  
斗升の米を乞はざれば  
何を以て此の辰を凌がん。  
静に思ふも活計無し  
詩を書して故人に寄す。

失題

我れ此の中に住してより  
知らず幾箇の時。

食を乞ふて市朝に到る  
路に舊識の翁に逢ふ。  
我れに問ふ師胡爲ぞ  
彼の白雲の峰に住むやと。  
我れ問ふ子胡爲ぞ  
此の紅塵の中に考ゆるやと。  
答へんと欲して兩ながら道はず  
夢は破る五夜の鐘。

櫻樓又櫻樓  
食は裁に路邊に取リ  
家は實に蒿菜に委す。  
月を見て終夜囁き  
花に迷ふて言に歸らず。  
一たび保社を出でしより  
錯つて箇の駄駄と爲る。

千峰一草堂  
終身粗布の衣。  
生ゆるに任す口邊の醭  
掃ふに懶し頭上の灰。

## — 拾 屑 と 食 乞 —

蛙の名義で盲蛙が永年かゝつて苦へたものとの説明を附して預けて置いたものでした。跋は盲の親類が神戸にあることを盲の口からかねがね聞いてゐたので匍匐様にして神戸へ盲のあとを追つて行きました。然し其の後三年経つのに二蛙とも未だに歸つて参りませぬ。

ヨ、脱俗者

最後に良寛さんの詩集の一部を掲げて徹底した乞食の心境を披露致したいと存じます。

— 拾 屑 と 食 乞 —

蕭條三間の屋  
粥を啜つて寒夜を消し  
日を數へて陽春を遅しとす。  
斗升の米を乞はざれば  
何を以て此の辰を凌がん。  
静に思ふも活計無し  
詩を書して故人に寄す。

失題

人生一百年  
汎として秋水の蘋の若し。  
紙口腹の爲の故に  
日夜精神を費す。  
奔走して積聚に苦しみ  
固く閉して隣に分つ無し。  
其の家間に埋まるに方つては  
一箇も身に隨はず。  
一箇も身に隨はず。  
他人快樂を受けて  
姓名杳として聞えず。  
此れを念へば實に哀むべし  
勉めん哉三界の人。

## 夢中の問答

困來れば足を伸ばして睡り  
健なれば則履を著けて之く。  
從他世人の讚  
任爾世人の嗤。  
父母所生の身  
縁に隨つて須自怡ぶべし。

廬は孤峯に在りと雖  
身は浮雲の如く然り。  
江村風月の夕  
孤錫靜に門を叩く。  
人間心事淡く  
牀頭茶烟濃なり。  
從他秋夜永し  
燭を剪る南窓の前。

一たび家を出でてより  
幾箇の春なるかを知らず。  
一衲と一鉢と  
膳々此の身を送る。

今日は城闕に遊ぶ。  
人生一百年  
汎として秋水の蘋の若し。  
紙口腹の爲の故に  
日夜精神を費す。  
奔走して積聚に苦しみ  
固く閉して隣に分つ無し。  
其の家間に埋まるに方つては  
一箇も身に隨はず。  
一箇も身に隨はず。  
他人快樂を受けて  
姓名杳として聞えず。  
此れを念へば實に哀むべし  
勉めん哉三界の人。

己に花を銜むの鳥無し

何ぞ鏡に當るの臺有らん。  
心流俗を逐ふ無く

人の獸癡と呼ぶに任す。

## — 拾肩と食乞 —

今蓬蒿の中に委す。  
行きて行樂の地に到れば  
松柏晚風に叫ぶ。

孤鉢千家の飯

布衣一身輕し。

食に飽いて何の作す所ぞ  
騰々太平に老ゆ。

昨日城市に出でて  
食を乞ふ西又東。  
肩は瘦せて囊の重きを覚え  
衣は單にして霜の濃きを知る。  
舊友何處にか去れる  
新知相逢ふ少し。  
行きて行樂の地に到れば  
松柏悲風多し。

昨日城市に出でて  
食を乞ふ西又東。  
力極まつて道の永きを覚え  
肩は瘦せて囊の重きを知る。  
疇昔の黄金の屋は

首を回らせば七十有餘年  
人間の是非看破に飽きたり。  
囊は城市に出でて行く行く食を乞ひ  
夜は嵐下に歸つて坐して禪に安んず。  
笑ふ可し一瓶と一鉢と  
生涯蕭灑破家風。

昨日城市に出でて  
食を乞ふ西又東。  
力極まつて道の永きを覚え  
肩は瘦せて囊の重きを知る。  
疇昔の黄金の屋は

首を回らせば七十有餘年  
人間の是非看破に飽きたり。  
囊は城市に出でて行く行く食を乞ひ  
夜は嵐下に歸つて坐して禪に安んず。  
笑ふ可し一衲と一鉢と  
生涯蕭灑破家風。

### 二、肩拾

#### イ、權

#### 八

東京ではバタ屋と申しますが、大阪では拾ひ屋とも、肩拾とも申します。權八と云ふのは拾ひ權八（平井權八）から轉來した肩拾ひの代名詞であります。此の「權八」をルン・ベン氏達は最もよく愛用致して居ります。此の權八にはガタロ（水中の奇竜より來た名稱）店終ひ、ふくろ（夜漁りとも云ふ）等があります。

#### ロ、ガタロ

ガタロには泥川や小川専門のものと、大川や海専門のものがあり、又共同便所や其他の便所専門のものがあつて、大抵は手探りで落したものをその觸感によつて拾ひ上げるのです。網を用ひるものもあります。底に沈んで居る珍寶と中間にあるものとあるそうです。

#### ハ、掘屋

掘屋と申しますのは塵捨場であつた跡等を掘り起して土壤とならずに殘存して居る硝子や金屬類を拾ひ上げるものであります。雨蛙と申しますのは雨の日に限り仕事に出て行くものであります。着代へさへないルン・ベン氏達は雨の日に肩拾ひに出て行こうとは致しませぬ、ですからそれだけ收入が多いわけです。

#### ニ、雨蛙

店終ひと申しますのは夕方から十時、十一時、十二時の店の閉める前後を狙つて掃除直後のものや、時には置き忘れたか捨てか解らない金目のものを拾つて歸る人々を申します。ルン・ベンには前科者が多いので夜間の肩拾を禁止して欲しいと云ふ聲が一般市民の間にも爲政者間にも多いのです。そして強窃盜のある度毎にその聲が取締當局にも保護當局にも強く大きく響くわけです。

### 黄金の山を掬ふ商賣

#### 便所漁り二人組取調べ

#### ノ、一日一圓五十錢になる

二十八日午前十時頃、今宮警察署で西川司法主任が臭い／＼と、鼻をつまみながら頭の先から足の先までババだらけの若者を取り調べてゐた、此の若者は名古屋市生れ住所不定西山精（二八）鹿児島生れ住所不定淋正吾（二一）＝何れも假名＝の兩名で世の中が

ふくろと申しますのは夜間の屑拾ひを申します。懷中電燈を片手に炭俵やバナナ籠を肩に塵箱を漁る連中です。屑車はガタ／＼と音を立てるのでふくろは之を用ひませぬ。犯罪者となる機会が多いことは悲しむ可きことです。強盜が入つた家の近くを屑籠を肩に軒下を漁つて居た屑拾もあつたことがあるとかで人々の心を傷めて居ります。それに『ルンペソが通ると物干竿の干物がひとりでにくる／＼と降りて来るし、路地の奥からはバケツや鍋がころ／＼と轉り出で来る』と云はれて居ります。落ちてゐないものを拾つて警察に御迷惑を掛けるものも多いです。これは間違の事実であります。それで、ルンペソの保護施設では夜間九時以後の出入を禁じ、出入口には鎌を下して、午前四時乃至五時になるまで之を開けないので。ルンペソ自身を犯罪から救ひ、市民自身を恐怖と盜難から守る爲めであります。

感謝されて居るのであります。

## 養魚泥棒へズドン

## 腰に散弾、呻く男を見捨て

## 仲間二人は逃げ去る

大阪市住吉區東長居町上田光治（三四年）同町南野久吉（五三年）の兩人は同町西の池に養魚池を共同經營して數萬貫の鯉、鮎

## 腰巻専門の賊

## 變態的前科ばかり三犯

五日午後五時港區桂町市岡バラダイス前市岡署桂町派出所前を

一見遊人風三十歳位の男が大風呂敷の中から赤いものをチラ／＼さし乍ら足早に通りすぎる舉動が不審なので同署員が本署に連行取調べた處右は香川縣生れ住所不定前科三犯山口清太郎（三四）で去年三月大阪刑務所を出所、ルンペソ生活に入り街から街へうろつき歩いては干し物から女の腰巻、肌衣を盗み毎日違った女のもの

のを肌につけては悦に入つてゐたもの、尙同人の前科三犯もみんな女物を盗んだ前科で物心つく頃より女の腰巻、ズロース、肌衣などの妙な蒐集癖を持つてゐたものである。（昭和十三年五月七日大阪日日新聞）

## 水道の鉛管を

## 盗み廻る 空家荒しの怪盜

阿部野署管内住宅街の空家に最近漸々と水道の鉛管泥棒が横行するので阿部野署で注意中、昨二十四日午後八時頃住吉區阪南町中三（家主南屋高津三番町三八小林彦二郎氏）空家で施設した水道鉛管を窃取しやうとしてゐる怪漢を同署植田刑事が發見逮捕した。右は愛知縣生れ淺川博三（二一）『假名』で水道鉛管泥棒を自白したがその被害數十件三百圓に上つてゐる。（昭和十三年四月二十六日大阪日日新聞）

## ト、寄せ高と屑拾の收入

某保護施設の屑拾の日收は昭和六年頃は平均二十三錢であつたものが、昭和九年には三十錢となり、昭和十二年には三十五錢となつて居ります。それが現在では四十四錢となつて居ります。非常時の特異な影響の一つであらうと存じます。最近の調査に依りますると、不充分ではありますが、寄せ屋二十五軒の一ヶ年の屑買上高は拾八萬圓（一ヶ月壹萬五千圓、一日五百圓）もあるとの

などを飼育してゐるが最近深夜盛んに盗まれるので、兩人は十二番獵銃で散弾をこめて待つてゐたところ、二日午前二時ごろそれとも知らず西成區今船町〇〇館止宿の紙芝居屋妹尾五太郎（四三年）同立花政一（三八年）同區西四條井上富藏（三一年）の三人があらはれて網や竿で魚を捕りだしたので南野は番小屋からズドンと一發ぶつ放したので井上は肩から腰に散弾でうちぬかれその場に昏倒瀕死の重傷を負うた、立花は腰部に數発をうけながら妹尾とともに井上を放置して逃走したが、憤慨してゐる上田はさらに棍棒を揮つて呻つてゐる井上をめつた矢鱈になぐつたが、昏倒したのでびっくりして附近の錦戸病院に昇ぎ込んだことを三日探知した住吉署では關係者を同署に引致し取調べてゐる。（昭和十三年五月四日大阪朝日新聞）

などと飼育してゐるが最近深夜盛んに盗まれるので、兩人は十二番獵銃で散弾をこめて待つてゐたところ、二日午前二時ごろそれとも知らず西成區今船町〇〇館止宿の紙芝居屋妹尾五太郎（四三年）同立花政一（三八年）同區西四條井上富藏（三一年）の三人があらはれて網や竿で魚を捕りだしたので南野は番小屋からズドンと一發ぶつ放したので井上は肩から腰に散弾でうちぬかれその場に昏倒瀕死の重傷を負うた、立花は腰部に數発をうけながら妹尾とともに井上を放置して逃走したが、憤慨してゐる上田はさらに棍棒を揮つて呻つてゐる井上をめつた矢鱈になぐつたが、昏倒したのでびっくりして附近の錦戸病院に昇ぎ込んだことを三日探知した住吉署では關係者を同署に引致し取調べてゐる。（昭和十三年五月四日大阪朝日新聞）

## チ、收入の少い人々

人にルンペーンに頗落後間のない人々の收入の少い理由を二三擧げさせて戴くことは許されてよいこと考へます。先づ第一に報告申し上げねばならないことは、恥しさの爲めに、人通の多いところ、人目につき易いところでは、子供が居てさへ、あの木製の塵箱の蓋が何十貫もある石の様に思はれて近寄る勇氣も、持上げる力もなくなることです。『ルンペーンが來た！ 穀潰しが來た！』と云はれることが何よりも恐ろしいのです。『おつさん何拾てんのや』と云はれることは身を切られるよりも辛いのです。それで人の居ない露地や淋しい方面の塵箱から有價物を拾ひ上げようと思致します。捨てる事の少ない方面、塵箱の少ない方面から多くを拾ふことは出来ませぬ。初めてのこととて要領が解らないのです。他の屑拾が拾つた後ばかりを追ひ廻すこともあります。けれども、何んにも落ちてゐないことも珍らしくありません。古参の屑拾になると人の廻つた後と氣がつけばどん／＼街を進んで新しい街を先廻りする様に致しますがそんなことも全然解りません。何んなものが交換價値が多いかも解りませぬ。嵩の大きい價値の少いものばかりを拾つて廻ります。屑拾に必要な手鉤も手挟もありませぬ。炭俵もバナナ籠もありません。拾つたものを手に持ち脇の下に抱へ、持ち切れなくなると繩で縛つて持つて歸ります。従つて拾ひ上げる高に限度があります。落ちて無いもの上

手に拾ふことも出来ませぬ。寄せ屋以外の屑を高く買取る家も知りませぬ。ですから初の中の一日五錢か七錢の收入は尊い收入です。精神的にも肉體的にも苦み抜いて得た金です。精一杯の努力をして得た涙に濡れた金です。

#### リ、死線を越えて

ルンペーンに頗落する迄には、頗落した経験の無い人には想像も出来ない、人に語り盡し得ない、人間が作り出した如何なる言葉を以つても現すことの出来ない苦しみを耐へ忍んで来て居ります。ところが屑拾に出る迄には更に之れに倍した苦痛を味はねばならないのです。死線を突破しなければ出來ないので。公園や橋で自殺から救はれ、無錢飲食と泥棒を思ひ止つた後に、二日も三日も飲食して、持物を、着衣までをも、全部賣り拂つた後に初めて出来る、取り残された唯一の生活方法です。實際人間が生活に行き詰ると自殺するか、泥棒になるか、ルンペーンになるか、狂人になるかより外に途はないのです。

二十二日午前五時半ごろ東區農人橋一丁目十一獵銃ケース製造業小原和三郎（四二）が臺所の流し場で西洋剃刀にて頸動脈をかき切り苦悶中を家人が發見手當を加へたが間もなく死亡した。原因は神經衰弱と物價高の商賣不振かららしい。（昭和十二年六月二十二日夕刊大阪新聞）

人にルンペーンに頗落後間のない人々の收入の少い理由を二三擧げさせて戴くことは許されてよいこと考へます。先づ第一に報告申し上げねばならないことは、恥しさの爲めに、人通の多いところ、人目につき易いところでは、子供が居てさへ、あの木製の塵箱の蓋が何十貫もある石の様に思はれて近寄る勇氣も、持上げる力もなくなることです。『ルンペーンが來た！ 穀潰しが來た！』と云はれることが何よりも恐ろしいのです。『おつさん何拾てんのや』と云はれることは身を切られるよりも辛いのです。それで人の居ない露地や淋しい方面の塵箱から有價物を拾ひ上げようと思致します。捨てる事の少ない方面、塵箱の少ない方面から多くを拾ふことは出来ませぬ。初めてのこととて要領が解らないのです。他の屑拾が拾つた後ばかりを追ひ廻すこともあります。行

くを拾ふことは出来ませぬ。初めてのこととて要領が解らないのです。他の屑拾が拾つた後ばかりを追ひ廻すこともあります。行

#### 南海へ飛込み負傷

五日午後零時四十分南海本線難波行電車が萩の茶屋驛南一番踏

切りを進行中厚司委の老人が飛び込み治療三週間の傷を負ふた、

北區空心町二丁目樋口豊吉（六八）で生活苦から自殺をはかつたもの。（昭和十二年三月六日大阪朝日新聞）

#### 悪の一歩前

#### 失職少年を保護

廿四日午後十時頃大阪驛西口三等待合室から曾根崎署員が鹿児島縣薩摩郡生れ田畑天雄（一九）＝假名を連行取調べたところ同人は本年三月郷里の中學校を卒業し去る十五日來阪したが職もなく所持金も費ひ果し數日間食べるも出來ずいたので今はこれまでと搔拂ひをせんものと機會を狙つてゐたことを自供した。目下郷里に引取方を照會中。（昭和十三年四月二十六日大阪日日新聞）

#### 失業ヤケ男

#### 二ヶ所に放火

十八日午前零時ごろ京都市下京區八條和氣町西入る薪炭商園部

茂一方の軒下に積んであつた割木から出火してゐるのを附近のものが發見大事に至らず消し止めたが不審火らしいので所轄署で調査中午前六時ごろ京都七條署へ『放火しました』と自首して出た男があつた。その男は東區本町二丁目加藤静雄（二五）といひ最近轉落したのを悲觀十六日死場所を求めて堺に來り同夜投身したも

やけとなり前記園部方に放火してその混雑にまぎれて一働きせんと企てたものと判明。(昭和十三年三月十八日夕刊大阪新聞)

闇の海上から生還

明石沖で身投げした青年

船員の六感に救はる

二十一日午前一時ごろ函館市船見町林康三所有貨物船公福丸(七五三噸、船長林安五郎氏)が大阪へ向け明石瀬戸の淡路江崎燈臺北西一哩半附近を航行中、見張りの二等運轉士山口克巳君(二九年)の耳に暗闇の海上から鷗か猫の鳴聲のやうなかすかな悲鳴が聞えた。山口君の六感は「海の遭難者が救ひを求めて居る声と判断、林船長に報告、直に停船して傳馬船を下し悲鳴を便りに漆黒の海上を捜査したところ果して『助けてくれ』と叫ぶ青年を発見、ワイシャツに猿々一枚で息も絶えぐの右青年を本船にうつし風呂に入れ手當を加へた結果一命をとりとめた。

この青年は高松市本町三七、百十四銀行員藤本匡雄氏次男典雄君(二三年)で今年同志社高商を出たが就職難に悩み去る十七日家出して大阪へ行き、二十一日午前零時神戸から日海運輸發動機船千花丸に乗船明石瀬戸で身投自殺を計つたが水泳が達者なため死に切れず助けを求めてゐたものと判つた。(昭和十二年六月二十日大阪朝日新聞)

ところが以上の様な苦惱を経て始めた屑拾も次第に慣れて恥しさが少しへり、金目になる有價物を貯えて來ると、生活の故にではあるが、一日に十里の道と二千軒の塵箱をジグザグに漁つて行く様になります。今宮から大國町、九條、築港、安治川、梅田玉造、猪飼野、生野、寺田町、阿部野と大阪のメインストリートを一巡する者も出來、又大阪から住吉街道を南下して堺市内を一巡して來る者も出來ます、そうかと思ふと住吉區の一割を細かく氣遣しに廻つて來るものもあります。

### ル、一人前の屑拾

開ける塵箱があります。白髪橋北詰の電氣工事店の○屋の塵箱です。銅の切端を澤山拾つて此の塵箱だけで日當になることがあります。

屑拾も古いものになると行く方面と行く時間がちやんと定つて居ります。老人等になると行く先々に顔馴染が出来て恵まれるものも澤山にあります。

### ヲ、地域と屑

地域的にみましても屑に特異なものがあります。船場方面には箱、紙函、板片、商品屑、繩屑等が多く、尻無川方面や九條方面には鐵屑が多いのです。そして安治川には石炭が、住吉には檻櫓が、飛田、新町、堀江、松島には不淨の腰巻、シユミーズ、襦袢、使用済のキラー紙。(時には炭俵に一杯詰めてあるのを興へられることもあると云ひます)食料品、残飯、銀紙等が多いのです。銀紙の多いのは第一玉突屋です。第二にカフェー、喫茶店です、銀行會社は少ない方です。

### ミ、カ、屑を買ふ家

何なんものが金になるかと申しますと瀬戸物以外のものは何でも金になります。然し高が大きくて交換價値の少ないものは屑拾は拾つては行きませぬ。原形のままのものや値段の高いと考へられるものは古物商や露店の見倒し屋(古物店の一種)に賣ります。屑としてどうなく一個の價値あるものとして高く賣る理です。屑は寄せ屋で賣るよりも消毒所の方が高く買つて呉れます。消毒所よりも専門店の方が高く買つて呉れます。それでは何故専門店へ持つて行かないかと申しますと、専門店では相當に同種類のものが溜らないと買つてもらへないので。それから寄せ屋と、寄せ屋に同居の權八とは一つの家族の關係にあります。他の店や消毒所で買はないものでも買つてもらへます。ですから専門店では物によると寄せ屋の倍額にも高價で買つて呉ますが、やはり寄せ屋で賣り捌くのです。専門店には次の様なものがあります。地金商には銅(アカ)専門店、アルミ(シロ)専門店、真鍮(黄)専門店、鐵(クロ)専門店、錫鉛専門店、硝子には酒醤油瓶専門店、薬瓶専門店、板硝子専門店、屑硝子専門店、牛乳瓶専門店、



石炭	同四	同四
古下駄	一足上	五
同	同下	五
下駄花緒	一足	二
食乞	一	一

## タ、何が氣樂か

『屑拾は氣樂だ！ 氣樂だから一度しだすとやめることが出来ない。』人々は必ずそんなに申します。屑拾自身もそんなに答へるときがあります。何がそんなに氣樂であるかと申しますと、

(一) 工場やオフィスで働く様に、何時出勤、何時休憩、何時終業と云ふ様に時間で縛られることがありません。

A、自分の氣の進んだときに起き

B、氣の進んだときに出かけ

C、氣の向いた方向に進み

D、氣の向いたまゝに休憩し

E、厭になればやめて歸ればよいのです

F、何人もとがめる人はありません

G、休まうと思へばそのまま休めばよい、一々ことわりの電話をしたり、歓動屈を出す必要もありません

H、途中で嫌になれば中退屈を出さずにさつさと歸つてくれればよいのです

- I、美しい衣類も労働服も要りませぬ  
J、何處で寝なければならぬと云ふこともあります  
K、寝てもよいのです  
L、飲食もしますが何うか斯うか食ふだけの收入があります  
M、仕事にあぶれて困るといふことはあります。雨の日には雨蛙となれば一日に一食の飯でも口にすることが出来ます  
N、一々他人の許可を受けたり、その指圖によつて働かねばならないこともあります

## L、拾ひに出かければ必ず何かを拾ひます

M、仕事にあぶれて困るといふことはあります。雨の日には

雨蛙となれば一日に一食の飯でも口にすることが出来ます

N、一々他人の許可を受けたり、その指圖によつて働かねばならないこともあります

O、勝手に無斷で塵箱の蓋を取つて拾へばそれでよいのです

## レ、眞に氣樂か

それでは屑拾は眞に呑氣かと云ふと決して左様ではありません。呑氣かと尋ねられて『あゝ呑氣です。一度これをやり出すとやめられまへん』と即座に返答するものは他に仕事を發見することの出来ない専しさを隠さうとする敗残者特有の負惜みからの返事であることを忘れてはならないと思ひます。

『野宿を三年もして苦しんだ。ここは温うてえゝ、ルンペーンはもうあいた。早う田舎へ歸つて元の床屋へ行きたい』これがルンペーン氏の偽はらざる告白です。死線を越えて、名譽も恥も自己も忘れて唯口腹の爲めの故に始めた權八です。氣樂で一番よい仕事

何一つ落ちて居りません。もう日は頭の上へ來て居ります。夏のこととて暑苦しいし腹は減るし、少々やけ氣味になつて居りました。その時行く手に子供の泣き聲が致します。母親が『恐いルンペーンが來た、連れて行かれるよ』と大きな聲で申しました。子供に聞かず心算であつたものが青チビの耳へよけいに明瞭に入りました。カツとなつた青チビは『おばさん、しゃれたことを云ふな、かまへんのか？』と云つたと思ふと空の屑車に子供を抱へ込んで一目散に走りました。『子取り』といふ聲に野次馬が飛び出して追つ駆けました。青チビも一生懸命に逃げました。然し車を押して居るかなしさと、もとへ子供を隠さうといふ惡意があつての逃走では無いので、間もなく捕へられて野次馬に嫌やといふ程袋叩きにされました。警察官が参りました。交番へ同行を求められ訊問を受けて居るときに母親が駆けつけて『まことに済まんことを申しました』と詫びを入れました。青チビは直に許されましたがなくられただけ損でした。冬の夜に人々が家の中で温く温くして居るであらうこと考へ、襤襤一枚の蒲團も無い慘めな生活を考へるとき、能力の足りない自分自身であることを知りながら自暴自棄になり易いのです。一家睦まじく郊外へ出て行くのを見ては見すぼらしい彼等は自然と心も僻んで自らを屬りたい氣持に襲はれることもあります。陽氣な春の日の光・すつきりした秋

であらう道理はありません。或る大都市の或る銀行の支店長をして居た男は三年餘りも屑拾をした後によい機會を得てチンドン屋の旗持になり、更にチンドン屋としてドラムを打つ様になつたが、『一度屑拾をやめると二日や三日ノーチャブ（飲食）であつても、權八は出來ませぬ。借金をしてもどの位苦くても一度と屑拾はしまいと決心して居ります』と申して居ります。それ程に屑拾は嫌なものです。南京虫の附着して居るものがあります。塵箱の蓋を取ると、濕つたいきれ、膿潰した臭氣がブンと鼻を刺します。もや／＼と吐氣を催さず臭ひ、うなりを立てゝ、飛び出す青蠅、金蠅、考へただけでもよい氣持は致しませぬ。三度の食事を充分にすることさへ出來ませぬ。子供までが『穀潰し』と申します。悪漢が來たかの様に家中へ駆け込んでバタンビンシャリと障子を閉めます。中には『お母ちゃんルンペーンが來たよ、バケツを入れて置きませうか』と申します。母は母で子供が無理を言つたり、泣いたり致しますと『ルンペーンが來るよ！ 恐いよ！ 早く黙なんさい。泣き止まないと遠い遠い處へ連れて行かれるよ。ルンペーンの子取が來るよ』と申します。それに就いて次の様な笑ふことの出來ない事件がありました。

青チビ（青森から來た少い男です）は朝早くから屑車を押し出かけましたが、どうしたものが人の拾つた後ばかり廻つて、

の空、これ等は艦體と、無一物を罵倒してゐるかの様に思はれてならないのです。屑拾を途中から止めて歸つて来る者のあることを御想像願ひます。朝三時から夕方五時までの一日十里の嫌な思ひの行軍は決して樂なものではありませぬ。心身を極度に疲労せします。睡眠の不足と營養の不足とを補ふ街ではなく夏は南京虫と疫病に、冬は寒風と風に、そして呼吸氣病と熱病に悩まされ、次第にひからびて行くさまはまことに哀れです。

或る者は屑拾をしてゐて終に思ひ餘つて自殺を致しました。關西線天王寺驛から今宮驛にかけての線路で毎年ルン・ベンの飛込自殺の多いことは實に驚く程です。

#### 更生不能を悲觀して自殺

十三日午後六時十分關西線天王寺發濱町行七〇九號列車が大阪西成區東田町ガード附近を進行中、列車めがけて飛び込み左足を轢断された若者があつた。市立今宮保護所内井靜馬(二三年)で『ルン・ベンをしてゐては金がたまらぬ、もう生きてゐられないから死ぬ』といふ遺書があつた。市民病院で手當を加へたが同夜絶命した。(昭和十一年五月十四日大阪朝日新聞)

或る者は氣が狂ひました。私は最近狂人になつた四人を知つて居ります。

Kは屑拾が嫌になつて煮豆行商人になつたが、三日程してや

め、今度は夜鳴うどんを始めました。然しこれも一週間程してやめにはぜんざいの屋臺店を出すのだとせつせと準備最中に気が變になりました。夜中に起きて水の入つて居らぬ風呂の火を焚いてゐたりしたこともありましたが、終には夜通し坐つたまゝで大國様の畫を一枚書くと、にたりと笑ひ、惠美須様の畫を一枚書くとくすりと笑つて『さつぱり駄目だ』とこぼしながら毎夜にたりくすりと笑ひながら書いて居りました。

Uは『八百億八百萬圓儲けた。これで銀行を建てるんだ』と友人へハガキを出しました。Jは各所の警察署へ救つて戴こうと思つて『此のハガキ着きましたら天王寺公園の藤の棚の下へ直ぐ貯百圓持つて来て下さい。先の分はまだ届きません』と書いて何回となく出しました。お金が欲しいといふ氣持がよくわかります。

#### ソ、塵箱を通して社會を視れば

一般社會の人々は好奇心をもつてルン・ベン社會を見勝ちであります。ところがそうした人の社會を權八は塵箱を通して眺めて居るのであります。今からAとBの家の話を聞いたまゝに報告申上げたいと存じます。

Aの家はスマートな新築で疊も襖も其他の調度も總て新品でした。新婚家庭かな? 妻の家かな? サラリーマンらしくはないし? と權八は考へたのです。修繕すれば間に合ふものでも捨て

まつたと權八は考へたのでした。

#### 初 夏 の

味 覚 は……

アベノ橋富士屋から

#### 乞 食 と

てあります。一寸汚れたもの一寸穴のあいたもの、結構なアルミ鍋、ビール瓶、シャツ、其他時節外れのものや一時不用になつたものをどんく惜し氣もなく捨て、あります。シャツを見ると自分の家で洗濯したものではなくクリーニング屋でさせたものでした。よい顧客だと毎日訪問して居りますと間もなく宿替をして居ります。この顧客を失つてはと宿替先へ行きますと以前よりは小さい家に代つて居ります。然し捨てることは以前と少しも變りませぬ。三度目に替つた先へ行つて驚いたことは、二階借になつてゐたことでした。この家の主人も下手をすると我々の仲間へ入つて來るかも知れない。自分も斯うした生活をしてゐたのかも知れないと考へたことでした。

#### 屑 拾 ——

#### 屑 拾 ——

Bの家の夫人はにこやかな美しい人でした。『何を拾つていらつしやるんですか?』如何にも馴れ馴れしく親しさを顔一杯に漲らして近寄つて参ります。屑車の中を窺き込んで『白粉瓶もお金になるの? 繩もあるのね! ガラスはあるぶないわね、歯磨のチ

ューブもあるのね! 釘の鏽たのから何もあるのね!』權八は『お金にならんのは瀬戸物の飲げと土と野菜の漬だけです。その外は何んでも金になります』と答へた後『どうぞ宜數く頼みます』と附け加へました。然しその翌日からは此の家の塵箱には瀬戸物の飲げと野菜漬以外には何も捨てない様になりました。し

**るる**

(番) 八五六  
二三三  
二五五  
寺王天電話

二階(洋食宴會場

三階(大小小間  
二十數間

初 夏 の  
味 覚 は……

アベノ橋富士屋から

#### 支 店

第四師團司令部  
大阪府  
大阪市  
天守閣

# 社會事業研究 六月號 目次

社會事業の對象としての宗教思想地區 赤神 良讓 一

農村に於ける奉仕の精神 鈴木榮太郎 二

長期戰下に於ける保健問題の一考察 竹中 勝男 八

二 斷種法の研究 竹内 愛二 三

結核豫防所感 太繩壽郎 三

? 符の行進曲 向井藻浦 三

兒童相談所の積極的活動 前川誠一 三

アメリカに於ける社會事業教育の發展 池川清 五

漁民と水上生活者の臺所調査 中村遙 五

乞食と屑拾 郡昇作 七

"祖國振興隊"の素描 林喜代一 七

故志賀志那人氏を偲ぶ會 聯盟主催 一

## 報情生厚阪大

府に勇士遺家族の中央相談所	二元
傷痍軍人會支部總會	一元
堺市社會事業協會十周年總會	二元
四天王寺悲田院竣工披露會	二元
市設住吉母子寮	二元
盲啞者の慈父五代翁の追善無言劇	二元
四月定例方面常務委員聯合會	一元
五月定期方面常務委員聯合會	一元
故志賀志那人氏を偲ぶ會	一元
第七回農繁期託兒所保姆講習會	三〇

大阪盲人會高橋貞吉▽大阪朝日

盲人學校廣瀬辰三▽八濱徳三郎

▽日本赤十字社大阪支部病院石

井俊光▽扇町職業紹介所城後小

咲▽大阪自彌館吉村敏男▽四條

曇婦人會木邨愛子▽日本兒童愛

護聯盟伊藤悌二▽博愛社小橋カ

ツエ▽小池うた子▽増田裕治▽

藤井孝紹▽城東方面五十嵐徳太

郎▽佐野町方面入江福造▽玉出

方面黒氏長藏▽大和田方面須佐

美八藏▽天王寺第一方面高橋和

三郎▽大阪市社會部寺島四郎△

同米谷豊一▽大阪市立京橋勞働

紹介所寒川喜一▽同淡路勞働紹

介所稻原武治▽同鶴保謹所石

川道彦▽同今里勞働紹介所手島

清芳▽同千鳥橋勞働紹介所後藤

新一▽同玉造職業紹介所江並憲

治▽同築港勞働紹介所橋田史郎

九條宿泊所糸山政六▽同海員宿

泊所松家岩吉▽玉出市民館矢野

弘三△同今宮保護所郡昇作▽同

此市民館谷口仁澄▽同中央職

業紹介所池川清▽同扇町産院余

田忠吾▽同今宮宿泊所湯口孝次

郎▽同西野田宿泊所山口斌▽同

青山茂壽

兒保護協會醫學博士西川爲雄○  
精神衛生、三田谷治療教育院醫  
學博士三田谷啓○應急手當、四  
天王寺施藥療病院醫學博士村田  
小野田伊久馬○自然物利用ニ  
ヨル保育、大阪自然幼稚園幸田  
院高森富士子○同上野光子○  
花枝○幼兒教育、ランバス女學  
院高森富士子○同上野光子○  
唱歌及遊戲、同元森愛子○同、  
同立花トミ○手技、同北村とし  
○見學ト實習指導、同山川道子  
町ランバス女學院に於て開催した  
から同廿八日まで天王寺區石ヶ辻  
會は、本年は一層大きな待望のう  
ちにその第七回を去る五月十八日  
に同主催の農繁期託児所保母講習  
会で、廿八日午後一時から社會事業  
館で終了式舉行、大野木時子さ  
んほか二十九名に大谷常務理事か  
ら終了證書が授與された

社 會 事 業 研 究	（毎月一回一日發行）		
定 一部	半ヶ年金 參 圓		圓 金貳拾圓均一
價 一ヶ年金五 圓			
振替口座大阪	北五七一四五二番地	大坂市北區瀬崎町一八番地	大坂市住吉區橋本町一二番地
發行所 大阪出版堂	印刷人 林 太郎	編輯人 津守 陸 太郎	電話 北五七一四五二番
大阪府社會事業聯盟	大阪市天王寺區伶人町	大阪市天王寺區石ヶ辻	（電話天王寺六七八六三七七番 攝書口座大阪二二六〇八八番）

# 母子栄養食堂に關する報告書

頒 價 實 費  
金 七十五錢

本書は、大阪府社會事業聯盟が、昭和九年秋の關西風水害の罹災による妊娠婦及び小兒の栄養障害恢復を目的として昭和十年四月より二ヶ年、大阪・堺兩市内に開設した四母子栄養食堂の實施成績報告書であるが、計畫當初からこの事業に指導的援助を與へ親く補給者の栄養状態を觀察した大阪市立扇町產院長醫學博士余田忠吾、大阪市立衛生試驗所技師茶珍俊夫、四天王寺施藥療病院醫長醫學博士村田定諸氏の執筆になる、各専門分野に立つ理論的文章が、どの家庭にもその日から應用できるやう平易に、併せ掲げられたる點正に栄養讀本とも言ふべきである。

戰時下において食品衛生の合理化が要請される今日、當時關係事業界にセンセイションを惹起したこの栄養食堂の驚異的諸記録が一巻の書となつて上梓されたことは洵に意義深く、ここにこれを江湖に推奨する。

- 【內容】
- 栄養食堂に就て
- 栄養の常識（第一章 何の爲めに食物を食べるか、第二章 栄養素の種類とその作用、第三章 栄養素概說 第四章 保健食と献立、第五章 料理と衛生、第六章 子供の健康と食物）
- 醫者の立場より見たる栄養食堂の成績
- 栄養食堂の成績
- 附表（主要食品の酸度とアルカリ度ほか三）
- 栄養食の献立
- 栄養食の獻立
- 附表（主要食品の酸度とアルカリ度ほか三）